主張性が児童の心理的ストレス過程へ及ぼす影響

○江口めぐみ¹・濱口佳和²

(¹東京成徳大学応用心理学部・²筑波大学人間総合科学研究科)

キーワード：主張性、心理的ストレス過程、児童、他者配慮、自己表明

The Effects of Assertiveness on Psychological Stress Processes in Children

Megumi EGUCHI¹ and Yoshikazu HAMAGUCHI²

(¹Faculty of Applied Psychology, Tokyo Seitoku Univ., ²Graduate school of Comprehensive Human Science, Tsukuba Univ.)

Key Words: assertiveness, psychological stress processes, children, consideration for others, self-expression

【 目 的 】

本研究では、児童の主張性が心理的ストレス過程へおよぼす影響を明らかにすることを目的とした。心理的ストレス過程に影響を与える要因として、周囲の環境や個人特性が挙げられており、個人特性のうちの一つに主張性 (assertiveness) がある。

これまでの研究では、児童へのアサーション・トレーニングの結果、主張性レベルの上昇と友人関係ストレスの低下が見られること (Avsar & Alkaya, 2017)、主張性が自尊感情を高め、適切なストレスコーピングの実行に有効であること (太田・嶋田・神村, 1999)、主張性の高さがネガティブ感情やストレス反応の低さと関連すること (関口ら, 2011; 寺田・新井, 2007) などが報告され、主張性が心理的ストレスの緩衝要因であることが明らかとなっている。

しかし主張性がストレスモデル全体の中でどのように作用しストレス反応の軽減に寄与しているかは包括的な検討が不十分である。よって本研究で検討を行った。

なお主張性は多次元性が指摘されており、本研究では主張性を自己表明、他者配慮の2側面から捉えることとした。

【 方 法 】

調査対象 関東圏内の公立小学校4～6年生306名

調査内容および手続き 個別記入式の質問紙により、集団一斉方式で以下が実施された。

1. 児童用主張性尺度 (濱口, 1994)。18項目4件法。
2. 主張における「他者配慮」尺度 (江口・濱口, 2009)。16項目5件法。
3. 心理的ストレス尺度 (長根, 1991) の「友達との関係」6項目。経験頻度 (4件法) × 嫌悪度 (4件法)。
4. 小学生用ストレスコーピング尺度 (大竹・島井・嶋田, 1998) の短縮版。12項目4件法。
5. 小学生用ストレス反応尺度 (嶋田・戸ヶ崎・坂野, 1994) の短縮版。12項目4件法。

【 結 果 と 考 察 】

自己表明・他者配慮がどのように心理的ストレス過程に影響を及ぼすかを検討するためにモデルを作成した。変数を4水準に分け、第1水準は自己表明と他者配慮、第2水準は友人関係ストレス、第3水準はコーピング、第4水準はストレス反応とした。性別ごとの差を検討するために、以下の3モデルに対する多母集団の同時分析を行った。モデル0は制約なしのモデル、モデル1はパス係数が等値と仮定したモデル、モデル2はパス係数および相関係数が等値と仮定したモデルであった。各モデルの結果を比較した結果、最も当てはまりのよいモデル1を採択した。よって男女でパス係数は等値であると判断された。最終的に採択したモデルを Figure 1 に示す。

Figure 1 主張性が心理的ストレス過程に及ぼす影響

* $p < .05$, ** $p < .01$, *** $p < .001$

誤差変数および観測変数は省略した。上段は男子、下段は女子。

コーピングでは、情緒的回避は自己表明から、行動的回避は他者配慮から、それぞれ抑制的影響を受けることが示された。この2つの回避的コーピングからは、ストレス反応への促進的影響が見られた。先行研究 (太田ら, 1999) では、主張性が適切なコーピングの実行につながるとされていたが、本研究において自己表明と他者配慮は、回避的コーピングを抑制することで、ストレス反応を間接的に低減させることが示された。情緒的回避は「一人で悩む」、行動的回避は「大声で叫ぶ」といった内容であり、ストレスに対して回避的で消極的な対処方略である。こうした回避的コーピングによりストレス反応が高まるという結果は、先行研究の知見 (Lazarus & Folkman, 1984; 嶋田, 1998; 三浦・上里, 2002) を支持するものと言える。

ストレス反応に対しては、パス解析の結果から自己表明から直接の負のパスが見られ、自己表明がストレス反応に対し直接の軽減効果を持つことが確認された。自己表明には葛藤場面での「要求拒絶」や「権利防衛」などの要素が含まれている。こうした主張は、自分の意見や考え、権利等を守ることにつながる。そのため事態の改善や不快感情の解消に繋がりがやすいことが考えられる。意見を表明することは、相手との意見の不一致や対立を生む可能性も内包しているが、結果的には後のストレス反応を抑制することが考えられる。

結果をまとめると、(1) 主張性は心理的ストレスモデルのコーピングとストレス反応に直接・間接的に影響し、ストレス反応の低減に寄与すること、(2) 主張性の2側面はそれぞれストレスモデルへの影響が異なる。自己表明はストレス反応を直接低減させ、自己表明と他者配慮は回避的コーピングを減らすことで間接的にストレス反応を低減させること、の2点が示された。